「劇団しましま」の活動を見学しました

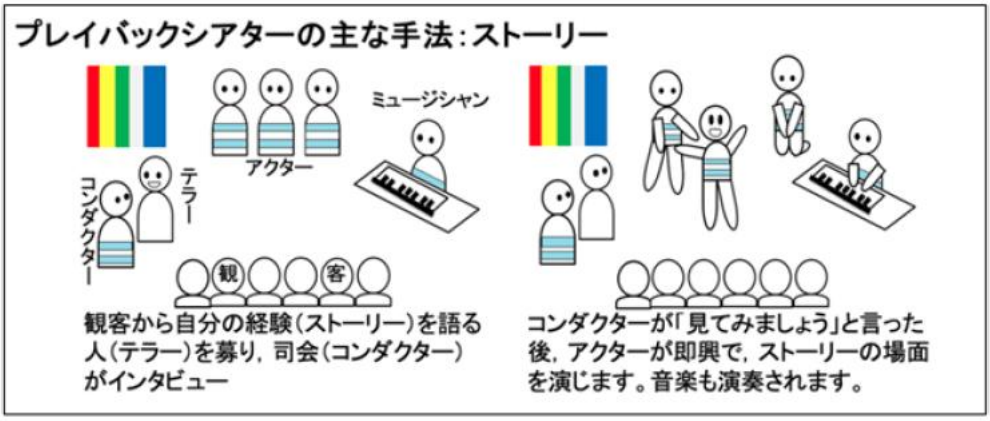
2026 年 10 月 18 日（日）に、東広島市民文化センター（アザレアホール）で開催された「劇団しましま」による 2026 年公演「プレイバックシアター　#大人の話を聞いて返してみた」を見学しました。



劇団しましまは、プレイバックシアター（即興劇）を活用し、インクルーシブなコミュニティの創造に貢献することを目的に活動をされています。今回の事業は、現代の青少年がプレイバックシアターの公演やワークショップを通じて、さまざまな背景や価値観を持つ他者と共感的に関わる経験や、対話的でインクルーシブな場の創り手となる経験を重ねることを目指したものです。

代表の吉川ひろみさんから、1970 年代前半に米国で生まれたプレイバックシアターは観客が語る日常の体験を役者がその場で演じる即興劇であり、教育や福祉、地域づくりなど幅広い分野で活用されていること、また自己理解や他者への共感、コミュニケーション能力の向上などにつながる活動であることを伺いました。

即興劇をイメージしやすいように絵もいただきましたので、ご覧ください。



©劇団しましま

見学に伺った日は、これまで複数回にわたって重ねてきたワークショップの成果を発表する集大成の公演の日でした。公演当日も練習が行われるとのことで、午前 10 時からの練習の様子を見学させていただきました。

参加者はまず円陣を組み、ポーズを交えながらニックネームで自己紹介を行いました。続いて、音楽に合わせて会場内を自由に歩き、音楽が止まるたびに近くにいる人と自己紹介を交わしました。緊張がほぐれたところで、参加者は内側と外側の二重の輪を作り、向かい合ってそれぞれに与えられた役になりきって即興で演じる活動に取り組みました。「お姫様と王子様」をはじめ、「陸上選手とコーチ」「おばあさんと孫」など次々とお題が出され、参加者は楽しみながら自由に表現していました。会場には活気があふれ、互いの表現を受け止めながら演じる姿が印象的でした。

その後、本番での希望を聞きながら、アクターグループとミュージシャングループに分かれて個別練習が行われました。アクターは本番を想定しながら、テラー（話題を提供する人）の話をもとに即興で演技を行っていました。一方、ミュージシャンはさまざまな打楽器を実際に鳴らしながら、それぞれの音が持つ雰囲気や表現の違いを確かめていました。「うれしい場面にはこの音が合いそう」「不安な気持ちを表現するならこちらの音がよいかもしれない」と、劇団しましまのメンバーから助言を受けたり、自ら試行錯誤したりしながら音づくりに取り組んでいました。

練習時間はあっという間に過ぎ、お昼休憩を挟んで午後 1 時から全体の流れの確認が行われました。最後に、劇団しましま代表の吉川さんから、「即興劇なので何が起こっても大丈夫です。できるだけ周りの人の動きを見ながら演じてください。ミュージシャンも、自分の心が動いた瞬間に音を入れて構いません。初舞台を楽しみながら頑張りましょう」と激励の言葉が送られました。

今回の公演は、劇団しましまのメンバー10 名と劇団員以外の参加者 12 名が出演し、来場者 22 名を含む約 50 名の参加の下行われました。

午後 2 時、いよいよ公演が始まりました。演者たちは劇団しましまの歌を歌いながら入場し、会場は温かな雰囲気に包まれました。プレイバックシアターでは、観客の中からテラーとなり、自身の体験を語る人が必要です。「果たして手を挙げる人がいるのだろうか」と少し心配していましたが、その不安はすぐに払拭されました。コンダクターを務める吉川さんが柔らかな雰囲気で会場の皆さんを促すと手が挙がったのです。ストーリーは質問を通じて少しずつ引き出されていきます。吉川さんは相手の話に丁寧に耳を傾け、うなずいたり言葉を繰り返したりしながら、「それでどうなったのですか」「その時はどんな気持ちでしたか」と問い掛けます。そのやり取りを通じて、出来事だけでなく、その時の感情までもが自然と語られていきました。

物語の内容や登場人物が整理されると、テラーがステージ上のアクターの中から登場人物役を指名します。そして吉川さんの「それでは見てみましょう」という声を合図に、即興劇が始まりました。アクターたちは事前の打ち合わせをすることなく、それぞれが物語を受け止めながら演じていきます。登場人物の気持ちや情景が見事に表現され、その自然で息の合った演技に、観客は驚きながらも次第に物語の世界へ引き込まれていました。

この日は、ショートストーリーから少し長めのストーリーまで、全部で８つの物語が演じられました。ミュージシャンは、打楽器を中心に、鉄琴やキーボード、波音を再現する楽器などさまざまな楽器を用いながら、それぞれの物語に寄り添う演奏を行っていました。時には明るく軽やかに、時には静かに不安や悲しみを表現する音が加わることで、場面ごとの雰囲気や登場人物の心情がより豊かに伝わり、観客を物語の世界へと引き込んでいました。

語り手であるテラーは、自分の物語が目の前で演じられる様子を見ながら笑顔を見せたり、時には涙ぐんだりしていました。観客もまた、その物語に自らの経験を重ねながら見守り、ともに笑い、ともに考え、物語の世界へ引き込まれていました。私自身も、これまでに経験した出来事と重ね合わせながら物語を見つめているうちに、自分自身を振り返る時間を持つことができました。また、登場人物の立場になってその気持ちを想像することで、いつの間にか心がほぐれ、穏やかな気持ちになっていることに気付きました。

公演で語られた物語は、「母親が晩年に認知症となり他界した話」「病気になった愛犬を応援している話」「酒まつりで自分のルールを貫いた話」「東広島の冬の寒さに驚いた話」「子どもの巣立ちと寂しさを感じた話」など、どれも日常の中にある身近な出来事でした。しかし、それらは語られ、受け止められ、演じられることで、一人だけの物語から、その場にいる全員で共有する物語へと変わっていきました。その光景からは、一人ひとりの人生や経験の尊さ、そして人と人とがつながることの温かさが伝わってきました。

今回の見学を通して、プレイバックシアターは単なる演劇活動ではなく、人と人とが互いの経験や思いに耳を傾け、理解し合うための対話の場であることを実感しました。演じる側には表現力や協調性、他者を受け止める力が育まれ、観る側には新たな気付きや共感が生まれます。また、一つの物語を参加者全員で創り上げる過程には、大きな達成感や仲間とのつながりが育まれていました。

演者からは、「自分では気付かなかった新たな一面を発見できた」「人との関わり方が変わった」「学校や習い事で忙しくても、この活動は楽しくて続けたい」といった声が聞かれました。またテラーからも、「自分の物語を客観的に見ることができた」や観客から「次回は自分もストーリーを語ってみたい」といった感想が寄せられ、この活動が人の心を動かし、新たな一歩を踏み出すきっかけになっていることがうかがえました。

公演の最後、会場は大きな拍手に包まれました。その拍手には、演じ切った達成感だけでなく、お互いの物語を受け止め合えた喜びや感謝の気持ちも込められているように感じられました。人それぞれに異なる人生や経験があり、その一つひとつが誰かの心を動かし、共感を生み、新たなつながりを生み出していく。その温かな時間に触れながら会場を後にし、プレイバックシアターがこれからも多くの人々の心を結び、豊かな対話の輪を広げていくことを願わずにはいられませんでした。また、自分の思いや経験を安心して表現し、他者の思いに耳を傾ける経験は、青少年が社会の中で自分らしく生きていくための大切な力を育むものだと感じました。この日、参加された皆さまが見せてくれた生き生きとした表情や仲間と支え合う姿からは、一人ひとりの可能性の広がりを感じることができました。今後、この温かな対話と共感の輪の中に、さらに多くの青少年が加わり、自分らし

さを見つけながら成長していくことを心から願っています。　　（本郷）